



平成31年度版 (2020年4月25日)

巻頭言

- ◆ 家族支援について考える …… p2
- ◆ 山田芳男さん逝く …………… p3
- ◆ 発達障害と言わないで …… p7
- ◆ ” その2 …… p9
- ◆ ” その3 …… p11

巻頭言

戦争と平和と科学技術の発展

あきこまを支援する会

世話人 高橋 恒治

現場を離れて15年になり、いろいろと断捨離に取り組んでいる中で、何故、教職課程の専攻とは異なる道を歩むことになったか振り返ってみました。中高課程の技術専攻で、4年次、仲間のほとんどが実験などを卒論テーマに取り上げていたとき、私は「技術史」を選びました。中高時代の嫌いな教科が歴史だったので考えられない選択です。資料を探るだけ、デスクワークだけで出来そうとの安易な考えでした。

当時の特殊教育へ気持ちが向けられましたが、対象となる人たちのためではなかったです。主免のほかに副免を取得するのが当たり前でした。就職に有利だからです。取得しやすかった養護学校二種を選びました。主免との関連があると言い訳していた記憶があります。教職に就いて8年間はいわゆる普通教育に身を置きました。そこに充実感が感じられず、以降特殊教育に向き合うことになりました。

技術史を学ぶと、戦争と科学技術について触れる部分があり、科学技術が発展する陰には戦争があることに気づきます。もちろんすべてではありませんが、科学技術の多くは、戦争のための創意工夫の結果でした。後々その技術は平和利用にも向けられているという構図です。ダイナマイト、カラー写真、GPSなどなど。

今、新型コロナウイルスで世界が混乱し、医療の場でも深刻な状況です。さまざまな対応が考えられていますが、トップダウンでは、効率が悪くスピード感がありません。また、方策が二転三転していることも不安を大きくしています。地域性、個に応じた対応、多様性を大事にした取り組みが求められます。コロナ対策は見えない敵との戦いです。

見えないものに気づき、関わっていく。大事です、頑張りましょう。

家族支援について考える

角館小学校 高橋香代子

今年度は、角館小学校で自閉症・情緒障害学級の担任をしています。2年目です

◆ かれこれ20年以上前の思い出

平成8年10月から9年3月までの半年間、秋田大学教育学部特殊教育研究室に内地留学する機会があり、「自閉症児・者の家族支援について」のテーマで調査研究したことがあります。サブテーマは「～秋田県自閉症児・者親の会の会員へのアンケート調査を中心に～」でした。学校教育の場を越えて障害児福祉の現状に広く目を向け、自閉症をもつ子どもとその家族の生活を豊かにするための家族支援について考察しました。教師の立場で、また、地域の一員として何ができるのかを再考させられた半年間でした。

秋田県自閉症児・者親の会は、当時、社団法人日本自閉症協会の秋田県支部として活動しており、会員数は72名で、中央地区57名、県南地区10名、県北地区5名でした。その中で郵送用紙アンケートに協力してくださった数は、幼児から小学校（小学部）段階が10名、中学校（中学部）・高等部段階11名、学校を終えた段階が27名の計48名でした。そのうち12名の方は面談や電話での調査にも応じて下さいました。回答率の高さは家族支援へのニーズの高さと現実の厳しさを物語っていました。

一口に自閉症と言っても、年齢も違えば、個々の障害の程度も、家族の置かれた環境も様々でした。アンケートの回答は、生の声をそのまま書き留めることで、一人一人のニーズを大事にするよう努めました。人の山あり谷ありの人生に於いて、もちろんフォーマルな立場での福祉、教育、保健、医療の連携が求められていましたが、インフォーマルな立場の支援を力にしているケースが多く、何と言っても家族、そして、親の会の仲間の存在が大きな力になっていました。（現在、「秋田県自閉症児・者親の会」の組織がどうなったのかつかめていません。知りたいものです。）

◆ いま残念に思うこと

20年が経過し、今では「合理的配慮」が法律により義務づけられ、発達障害が新聞やテレビなどで頻繁に取り上げられるようになりました。テレビ番組に手話通訳が付くことも多くなりました。そして、インターネットからは膨大な情報を得られるようになり、スマホで繋がることもできるようになっています。しかし、どんな時代も人の発達は生活の全体的なバランスの上に成り立っており、発達に関わる親・家族の役割の大きさは、言うまでもありません。

最近、以前に比べて残念に思うことがあります。一つは子どもと触れ合う時間のことです。通級制度が法制化される前の「ことばの教室」「きこえの教室」の時代は、もう少し時間的に余裕があったように感じています。保護者と子ども達と一緒にレクリエーションを楽しんだり、保護者の学習会が計画されたりすることも多かったように思います。しかし、通級制度が法制化されて以来、通級を必要とする子どもが増えており、通級教室に時間的余裕が無くなっています。現場の担当者の苦労は大きく大変です。一人一人のニーズに応じて相談活動や指導をするのが精一杯です。

二つ目は、今、秋田県内の「きこえ」「ことば」「まなび」の指導の場に親のつながりが薄くなって

きていることです。保護者が、親の会を必要としていないという声も聞きます。しかし、人と人が温かい組織の中で縦に横に繋がって欲しいのです。そんなインフォーマルでピュアなサポートの場が家族支援として是非必要だと思えてなりません。

◆ 終わりに

私自身は、秋田 LD・AD/HD 親の会（通称「アインシュタイン」）と「秋田県聴覚障がい児をもつ親の会」の賛助会員になることで、親の会から貴重な情報をいただいています。また、奇数月の第3土曜日に開催されている「あきこまの集い」は、誰でもOKのみんなに開かれた会です。そして訪れた人が、また来たいと思えるピュアな会です。そんな魅力に惹かれて参加しています。

本人も家族も周囲の人も、みんなで繋がり合う場を大切にしたいと思うのです。

<令和元年（2019）5月18日>

山田芳男さん逝く

あきこまを支援する会 世話人
高橋 恒治

秋田県の聴言研の道を拓いてこられた能代市の山田芳男さんが、8月30日亡くなられました。新聞報道（9/3）で知りました。86歳でした。病気で死去とあります。病気療養中ではなかった、急に亡くなられたのではないかと推測しています。ご冥福をこころよりお祈り申し上げます。

山田さんについては、昭和50年ころから平成20年ころまで、きこえの教室やことばの教室を担当した方ならご存じのことでしょう。それほど、秋田県の聴言研に尽力されてきた方でした。近年はお目にかかることはありませんでした。私が最後に直接お目にかかれたのは、平成23年夏、能代市で開催された第39回秋田県聴覚・言語障害教育研究大会のとき、総会、分科会そして夜の懇親会の時間でした。平成23年9月発行のOB会報「潭潭」に“ 回想 第39回秋田県聴覚・言語障害教育研究大会に参加して ”と題して寄稿くださいました。以下、再掲します。

回想

第39回

秋田県聴覚・言語障害教育研究大会に参加して

OB会 山田芳男

8月8日から9日にかけて、第39回秋田県聴覚・言語障害教育研究大会が、能代市中央公民館を会場に開催されました。私にとりましては、当研究会が能代市で行われたことはまことに嬉しく灌漑ひとしおでありました。と申しますのも、

当研究会が発足したのは、当市の湊城第二小学校「ことばの教室」からであったからです。発足当時の事象がふつふつと蘇ってまいりました。当時、秋田県の「ことばの教室」の開設数は5教室でした。教室同士の連携はありませんでした。各教室でどんな教室経営をしているのか、どんな指導法で行っているのか、お互い皆目わかりませんでした。そこで梅田先生と相談しまして、各教室経営について話し合いを持ったら如何かと、各教室に呼びかけたのです。それは、昭和45年11月30日のことでした。ところが、当日11月というのに生憎の猛吹雪におそわれたのです。あまりの吹雪に交通機関は麻痺状態となってしまいました。これでは延期しなければならないのかな？、と思っているところへ飛びこんで来たのが鶴舞小の遠藤先生でした。そして花輪小の秋林先生、朝倉小の小松先生、旭南小の能美先生と続々と集まったのです。全員雪まみれでした。先生方のこの熱意には感激しましたね。早速、梅田先生の司会進行で会が始まりました。当時この教育は黎明期です。何を手がかりに話し合うのか、教科書はないか等資料を探しました。当時の文献は、①音声言語病理学、②言語病理学診断法、③ことばの治療～チャールズ・バン・ライパー著、日本版では④言語障害治療学～田口恒夫著～、⑤吃音研究ハンドブック～神山五郎著～、の5冊ぐらいのものでした。この文献の中から主に③と④を参考に具体的な治療方針等を決めていきました。討議した内容は、①主訴、成育歴のとり方、②各種検査とその結果のまとめ方、③指導方針、指導計画の立て方、④学級における実態調査の在り方等々でした。②の検査の部では、(1)構音検査、(2)知能検査、(3)語音弁別力検査、(4)聴力記銘力検査等、そして、検査の具体的資料としてどんなものを作成したらよいか等話し合いました。今こうして書いてみると誠に素朴はもので苦笑もでてくるのですが、当時は真剣で精一杯の仕事でした。一生懸命議論しました。少人数でしたが、この教育を少しでも前進させよう、この教育をなんとか軌道にのせようとする情熱・熱意・使命感といったものがありました。会は午後4時終了、この会の名称を「第1回秋田県ことばの教室担当教員研究会」としました。この研究会の誕生は、その後の教室経営の道しるべになったのではないかと考えます。それなりに大きな意義があったのではないかと考えています。この研究会が現在の「聴覚・言語障害教育研究会」の前身であります。たった5人か6人で発足したこの会も、今年で39回目を数えました。渡された資料をみますと、参加者は60余人、中には父兄の方もおられました。多数の方々によって、この会が支えられていることがわかります。そして研究会の在り方も、昔からみるとかなり様変わりしてまいりました。このたび特筆したいのは、石川友正氏の

「相互理解について」、と題しての講演でした。講演内容は省略いたしますが、その講演態度は、正に堂々たるものでした。石川友正氏は聴覚障害者です。朝倉小学校の卒業生で、現在東芝に勤務しています。バスケットの選手です。胸板の厚い背の高い体格のよい、スマートな、見るからにスポーツマンの風格をもっており、惚れ惚れするような好青年です。講演はすべて手話でおこないました。向かい側に座っている手話通訳者が間髪を入れずに通訳いたします。二人の呼吸はピッタリと一致します。手話での講演とはなんと素晴らしいことか。石川氏は、これまでの生い立ち、体験、悩み、希望などを赤裸々に述べます。指先から紡ぎ出されるその言語には、生きている熱いエネルギーを感じました。聞く者に深い感動を与えた見事な講演でした。研究会の内容も着実に進歩発展の道を歩んでいるようです。

私は、この研究会に参加させていただいて本当によかったと思っています。親の会会長の辻久視先生、OB会会長の高橋恒治先生、アドバイザーの石井辰徳先生、本郷光先生、松橋英雄先生、各氏に久しぶりにお会いし、お話ができましたこと、大変嬉しく思いました。そしてこの研究会に参加するよう促し、その労をとってくださいました、能代市立淳城南小学校の佐藤昌子先生には、心より熱く御礼申しあげるところであります。

今後、当研究会がますます発展されることを祈念いたしております。

あきこまを支援する会前身の「秋田県聴覚・言語障害教育研究会 OB 会」が発足したのは平成7年です。翌年6月に会報「潭潭」が創刊されました。その後、「潭潭」はOB会報からあきこまを支援する会会報と引き継ぎ、現在まで休まず発行しています。

研究会が発足して40年目となる平成24年8月には、散逸している「潭潭」を一冊にまとめました。(会報潭潭～創刊からこれまで) HP「あきこまのたまり場」を検索すると読むことができます。

このまとめによると、OB会報は平成8年から12年まで年1回発行されてきました。(10年は2回) 13年は休刊。

14年には、聴言研事務局が県北(淳城第二小)に回ってきたことを機に、発行回数が増えました。山田芳男さんが梅田信彦さんの協力を得ながら会報の企画・発行を担当しています。14年から16年まで3か年担当しました。<>に山田芳男さんの記事掲載のページを示してあります。

◆平成14年7月 会報「潭潭」14年度1号 研究会事務局 県北(淳城第二小)

◆ " 8月 2号

第30回秋田県聴覚言語障害研究大会 分科会「言語発達遅滞部会」 <冊子ページ 21>
OB会員メモリアルホール (これも新企画)

◆ " 10月 3号

親子二泊三日の合宿キャンプ開催

～秋田県ことばを育てる親の会主催～

報告

<冊子ページ 34>

OB 会員メモリアルホール 「治りますかと聞かれて…」

<冊子ページ 39>

◆〃 12月 4号

① 秋田県聴覚・言語障害教育研究会

30周年記念公園・式典・祝賀会（平成14年11月22日）概要報告

・ 先に開催した研究大会（7月30日・31日）

・ 30周年記念誌発行 研究会の沿革（三十年のあゆみ）

・ 「秋田のきこえとことば」の冊子が発行されていることの紹介

<冊子ページ 45、46>

② OB 会員メモリアルホール 教科書のこと

<冊子ページ 51>

◆平成15年7月 会報「潭潭」15年度1号 …… 研究会事務局 県央（大住小）

潭潭編集 山田 印刷（中通小）

MEMORIAL HALL 2003 <<回想記>> M子さん

<冊子ページ 71>

◆〃 9月 2号 親の会全国大会（小樽）参観記（編集後記）

<冊子ページ 86>

◆〃 11月 3号

◆〃 16年2月 4号 MEMORIAL HALL 2003

随想二題 「会話」の喪失と「温かさ」の希薄化

野生動物の餌付け

<冊子ページ 109>

◆平成16年7月第1号、10月第2号、17年2月第3号

3号の【編集後記】では次のように述べています。

≪ 会員の皆様の声を記録しておきたいと願い平成14年から始めた試みも今年で3年、12回のOB会会報の編集作業もここに終了しました。文章の行間に（私信も戴きました）息づく皆さんの語りかけに思わず息をのむこともあり、そして笑いあり、喜びあり、驚きあり、学びあり、で私にとって本当に楽しい3年間でした。これまでのご協力に感謝し、私の会報編集の仕事を終えます。ありがとうございました。 山田芳男 ≫

<冊子ページ 139>

【 これまで、研究会の事務局は県北、県央、県南の輪番により、一年交代してきました。OB会に関する事務も担い、研究会を担当する現職の方々のお大きな負担になっていました。平成17年度から、OB会員が会報潭潭発行、印刷そして発送も受け持つことの改革をおこないました。 】

◆平成17年度 第1号（平成18年1月）

◆平成18年度 第1号（平成18年11月） 第2号（19年2月）

◆平成19年度 第1号（平成19年8月） 第2号（20年3月）

◆平成20年度 第1号（平成20年7月） 第2号（21年3月）

巻頭言 ことばの教室 開設当時を語る 能代市 山田芳男

<冊子ページ 164>

◆平成21年度 第1号（平成21年7月）

◆平成22年度 第1号（平成22年7月） 第2号（平成23年2月）

◆平成23年度 第1号（平成23年9月）

「回想 第39回秋田県聴覚・言語障害教育研究大会に参加して」

<冊子ページ 188、189>

平成 24 年 8 月、創刊からの会報潭潭を 1 冊にまとめました。秋田県聴覚・言語障害教育研究会発足 40 年の節目の年でした。OB 会として何かできることはないかと検討しているとき、この教育に大きく貢献してきつつも大役を終えて解散した言障協（辻久視会長）より OB 会に金的支援がありました。この支援を活用し、歩みを冊子にしてプレゼントしました。会員数ぎりぎりの部数でした。後に冊子の内容を目にすることができないと思われる方々のためには、OB 会のホームページ「聴言のたまり場」に冊子をアップしました。現在は「あきこまのたまり場」で検索できます。

～ 山田さんの意思を引き継ぐ ～

「ことばの教室」に関係する会員を中心に発足した県言研（昭和 50 年代に県聴言研に拡大）と、その後現場を離れた OB が立ち上げた聴言研 OB 会が、聴覚障害、言語障害の課題解決に取り組んでいるなか、現場では発達障害がクローズアップされてきて、その教室（「きこえ」「ことば」に準じての代表名称「まなびの教室」）も年々増えてきました。しかし、現職担当者への入れ替わりが激しくなり、OB 会員の人数も少なくなり、従来の研究組織では対応が難しくなっていました。OB 会としても様変わりする必要を感じました。

一人の子どもと担当者がかかわり合う時間は数年と限られています。しかし、一人の子供とその保護者の関係は、生まれた時からずっと、学校を出てからも続きます。長く子育てをしてきた保護者の知恵を集め、さらに将来に向けて保護者に力を付けることがとても重要です。そのための OB 会の存在は貴重ですが継続にはいろいろな課題があります。喫緊の課題は、バトンタッチです。

山田さんが仲間とともに研究会組織を立ち上げ、担当を離れてからも OB 会員として後輩にアドバイスを続けられたように、「先輩から後輩へ」の担当者間の結びつきは大事です。それだけではなく、保護者の力をもっともっと高めるためにも、幅広く門戸を広げ、継続した取り組みが求められます。

そうした意味で「あきこまを支援する会」は 秋田の「あ」、きこえの教室の「き」、ことばの教室の「こ」、まなびの教室の「ま」の頭文字を並べ、幅広い対象の名称とし、継続できる活動を目指しています。 “ 山田さん活躍の時代をもう一度 ”

《 2019.9.10 》

発達障害と言わないで

あきこまを支援する会 高橋恒治

発達障害の言葉が身近になって来ました。これまで何とも思わなかった発達障害という表現。発達という言葉に障害の言葉をくっつけていることに違和感を覚えるようになりました。あきこまを支援する会でも気にすることなく、発達障害を話題にしてきました。しかし、聴覚と障害、言語と障害の組み合わせと異なり、発達と障害は相反する表現で単純にくっつけるのは変なのではないでしょうか。

「発達」は世の中のあらゆる場面で適用される全体にかかる表現です。それに障害がくっつくと、すべてがダメを意味します。最近では、良い意味での特殊な能力を有する人を発達障害者の事例として扱って

ます。発達障害には負の部分だけではありませんよ、と悪いイメージを払拭する、言い訳のように見えます。一方、障害については、その表記をめぐる話題になり、いまだに統一はされていません。大事なものは表記云々ではなく、障害が意味するところをはっきりさせ、偏見や誤解を解く必要があります。

そこで、「発達」は終わりのなく伸びていくもの、「障害」は一度出来ていたものがある事情で出来なくなったものであると規定してみます。すると、発達障害の言葉は矛盾を含んでいます。発達障害そのものについてよくわかっていません。それこそ発達の途中なのです。

1 料理が出来ない。これは料理障害でしょうか。

私は料理が不得意です。でも、料理障害だと思いません。なぜなら、やる気が起き、時間をかければレストランのような立派なものでも、生きていける食事は作れるような気がします。料理について発達途中にあります。料理おんちと自称しています。一方、料理が出来ていた人が高齢になって料理がおっくうになったとか、足腰や手の動きが悪くなって料理がうまく出来なくなったとすれば、これははっきり言って料理障害者（プラス他の部分の障害者）になったのです。

読めない漢字があつて困ることがときどきあります。忘れてしまったのではなく学んでいないのです。自分と関係のない世界での言葉、いわゆる専門用語は読めないのは当然です。この場合、「読字障害」とは言いません。必要があれば調べられる。専門用語読みの発達途中にあるわけです。専門用語おんちなのです。同じように学んでいない漢字を書けない時も「書字障害」ではありません。

一方、以前書けていた漢字が書けなくなった場合ははっきり言って「書字障害」です。書く機会がなく忘れてたり、何らかの影響によって脳の記憶装置の中から引き出せなくなったりしたのです。計算力も電卓に頼っていると出来ていたものが出来なくなり、計算障害者です。幼児が計算の仕方を学んでいないために計算できないのは計算力の発達途中にあるので計算障害児ではありませんね。

このように、障害とは、出来ていたことが出来なくなった、機能が弱くなってきたときに言い表すのにふさわしい言葉です。高齢になって、聴覚、言語、肢体、知覚などを使って出来ていたものが出来なくなったとすれば、間違いなく障害者です。それに対して、聴覚、言語、肢体、知覚など発達の途中にある子どもを「〇〇障害児」と何の不思議を感じることなく口にしてきました。深く反省しています。

2 高齢のほかにも障害児・者となるリスクがあります。

年齢を重ねなくても、公害、交通事故、薬害などで私たちの周りは障害児・者なるリスクにあふれています。最近気になるのはスマホです。新聞（11月19日付け、さきがけ新聞）に、「県内不登校27%増」の大見出しで増加率が過去最高との記事が載りました。小中学校18年度調査結果です。増えた理由として、スマホ利用による昼夜逆転、学業不振、そして無理に登校させなくてもよいという考えの浸透」の三つをあげています。

スマホ利用の弊害に関しては、以前「スマホに子守りをさせないで」と警告する文言がありました。同じような言い回しは40数年前にもありました。テレビが普及し、親が子育てよりも家事などに忙しくしている状況を心配して「テレビに子守りをさせないで」と題する研究著書もあり、普及してきたテレビの幼児への影響について警告したものです。今、スマホの利用問題は、子どもだけでなく、大人にも確実に広がっています。手動で出来ていたことをやらなくなり、出来なくなった。障害児・者になります。書字障害児・者になると言えば分かりやすいでしょう。障害児・者予備軍にあるのです。

児童生徒の学業不振による不登校は、「社会人の業績不振による生きにくさ」に似たものがあります。やはり最近の新聞記事に「内館牧子の明日も花まるっ！ オール3という失策」（11月17日）があります。「みんな同じが大事」と考えた結果生じた問題に触れています。特異性を無視し、「同じ目標を置く、同じことをさせる」ことが平等であり、大事なことであるとの誤解から生じています。教員として「平等と公平」の違いに気づいていれば防げたのですが、外から異文化が入って来ない時間の長かった島国に育った日本人のほとんどに見られる意識がベースにあり、なかなか気づきません。

3 十人十色、百人百色。測るモノサシの数が少な過ぎると多くの問題を抱えます。

先ほどのオール3というのは、「みんな同じで、みんないい」の結果です。ある基準値を設け、そこに至らない場合、別扱いにすることはよくあります。子どもの発達を、月齢、年齢で判断することもその一つです。基準値と比較することで子どもの発達に不安を感じている親は多いです。同じ時期に同じように発達できなかったが、時間をかけることで、少しずつ出来るようになるのです。初めから出来ない場合は障害ではない、発達の途中にあると考えると接し方が違ってきます。

人生いろいろ。時々、自分の良いところ、ダメ・いけないところを測ることが必要です。人にモノサシを当てて「よい・ふつう・わるい」と測るには、いろいろなモノサシが必要です。モノサシは種類が多ければ多いほど、細かく実態を把握できます。数値だけのモノサシ（アナログ、デジタル）で測れない、経験というモノサシもあります。

「重症心身障害児のように生まれ、重症心身障害者になって死ぬ」。これは私がこの道に入るときの指導教官の一言です。これは分かりやすい表現ですが、前半に間違いがあります。生まれた時何も出来ていない（出来ていないように思われる）のは障害とは言えないからです。これから、長い時間をかけて、さまざまな発達を目指して進んでいくのです。「どうせ死ぬんだから」と言って高齢者がやる気を起こさないことも問題視されます。発達途中の子ども、障害者となった大人の存在が物事の発展に寄与するのです。

人（子どもや大人）の問題だけではありません。大きく、秋田県が抱えているとする問題にも、障害になってしまったもの、発達の途上にあるもの、さまざまです。他県と同じように「オール3」になることを目指さず、さまざまなモノサシを持ち出して、良いところ、悪いところを絞り出して、それぞれの伸び、発展・発達を考えて行きましょう。秋田は発達障害にあるなどとは決して思わず、言わないようにして。

< 2019.11.30 >

発達障害と言わないで その2

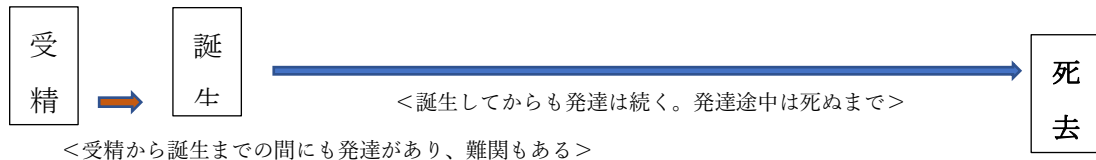
あきこまを支援する会 高橋恒治

1 十人十色、百人百様。すべての発達に「正常」「健常」は考えられない。

前回の「発達障害と言わないで」は、発達と障害をくっつけて表記するのはおかしい、発達とはすべての事象に当てはまる言葉であり、人の存在を全否定しているかの印象を与えると書きました。一方、人として生まれ、誕生するまでに限っても、さまざまな発達があり、その一部分がうまく発達できない

でいることは十分考えられ、そのことを障害であるとするのは正しくない、発達の途中にあると考えたいと述べました。すべてが発達できていないとは考えられないのです。見えない部分がたくさんあるので気づかないだけ、そのモノサシを持っていないのです。すべてに「正常」「健常」であるとは考えられないのです。(現時点で発達障害に代わる用語は、「発達デコボ」「発達プラマ」「発達オンチ」など)

誕生してから死を迎える間際まで、個の発達は続き、周囲の理解・発展に貢献できます。



2 「生きてるだけで百点満点」「生まれてきてくれてありがとう」

この言い回しを聞いたことがありますか。群馬県の助産師、鈴木せい子さんからのメッセージです。鈴木さんは受精から誕生までの間に、人は三度の難関をくぐりぬけてきていることに感動してきました。第一の難関は、卵子と精子との出会いです。しっかりした卵子と精子が結びつく必要があります。次の難関は、産道を通って胎内から出るまでの間の戦いです。回転しながらうまく進みます。最後は肺呼吸を獲得するときです。へその緒からの酸素の取り入れを、鼻・口から吸入するためのスイッチに切り替える必要があります。

この難関をくぐり抜けて来た赤ちゃんを取り上げたときに感じた鈴木せい子さんの思いが「生きてるだけで百点満点」の表現になったのです。それだけ頑張ってきている子どもに大人は何を求めるのでしょうか。子どもには、その子に備わった能力があることを思うとき、外野にいてあれこれ言うことがなんと多いことでしょう。

(以下引用)「一番頑張っていたのはお母さんではなく赤ちゃんなのです。受精卵になる前からオギャーと生まれるまで間、赤ちゃんの身にとんでもないことが起きています。それは私たちが想像もできないような、赤ちゃんにとって生と死を分ける熾烈(シツ)な戦いです。針の穴ほどの小さな受精卵だった体がわずか 280 日の間に、何と 2 千倍もの大きさになって生まれてくるためには、大人ならずっと全力で走り続けるためのエネルギーと同じくらい使います。生まれてくるときも苦しいのはお母さんだけではありません。赤ちゃんは生まれる直前、子宮が収縮して、へその緒が締め付けられて酸素不足になる中、まさに命がけの頑張りで産道にくぐりぬけてくるのです。」

3 新聞報道 「夢が少女を前向きに」 <秋田さきがけ 聴診記 澤石由記夫 2020.1>

澤石さんをご案内のとおり、県立医療療育センター副センター長です。9 年前、県南の小学校に通う 2 年生の女兒に出会います。コラムの内容は次のようなものです。

- ・初めに会った時、親が受診理由を話そうとすると、少女は割り込むように早口で語り始めた。私の質問には少し答えるだけで、少女はすぐ自分の話に戻り、話題は二転三転した。
- ・授業中に問題が解けず教室から飛び出した。誰にでも体を寄せてくる、空想の世界にいる、一方的に話し、会話にならない。これらの状況から少女はアスペルガー症候群と考えられた。
- ・幸い、1 クラス 10 人ほどで同級生たちとは幼稚園から一緒だったため、トラブルなく過ごせていた。
- ・親には「本人の特徴を受け入れストレスなく過ごせるようにすれば、社会性が身に付く」と説明した。

- ・以降、長期休みごとの受診とした。
- ・小3。独り言が減った。少女の突飛な発言も、担任教諭は「ムードメーカー」と評価してくれた。4年の時、苦手な科目に興味を持てなくなると「これも君には必要なこと」と諭してくれた。
- ・4年の後半から上級生にからかわれるようになった。また、本人も自分が他の子とは違うと意識するようになった。
- ・外来で「やっぱり私はバカだ」とつぶやいた。親には成長過程であると説明し、待ってあげるよう助言した。
- ・小5の冬休みに、幼い頃から読書が好きだった少女は6冊の小説を書いた。6年生になると、空想の世界をいくつもの小説にした。
- ・中学に入ると「将来はファンタジー系の小説家になりたい」と言った。中2の時、「アスペルガーの本を読んだら自分に当てはまるものがたくさんあった」「小学校では誰にも認めてもらえず、うつ状態だった」「今はどうやったら自分を理解してもらえるか考えている」と話した。
- ・中3では進路に悩んだ。自宅近くに合格圏内の高校があったが、隣県の私立高校に入ることにした。説明会に参加し「この高校なら、自分を受け入れてくれるかもしれない」と思ったのだった。高校に入ると「宿題が多くて大変、からかう子が何人かいる」と訴えながらも表情は明るかった。
- ・高校2年になった今年の夏休み、「良い先生がいて、友だちもできた。携帯小説に投稿しているけど全然駄目。落ち込んだりもするけど、1時間後にはけろっとしている」と話した。
- ・そしてこの冬休み、「友達のおかげで落ち込むことはなくなった。小説を通して伝えたいことを考えている」と話した。 **少女はもう発達障害の女の子ではなく、個性的で魅力的な女性になっていた。**

4 「あきたペアレント・トレーニング勉強会」(第1回。2019.11)

澤石さんはこの会を企画し、昨年初めて開催しました。この記事(秋田さきがけ 1月16日)のタイトルは「接し方変えてみよう」。前文で澤石さんは「まずは子どもに関わる専門スタッフの間で情報を共有し、いずれは保護者が学べる場をつくりたい」と話しています。澤石さんの望みは「保護者が学べる場をつくりたい」。あきこまを支援する会の願いと同じ方向にあることに勇気づけられました。

5 『「発達障害」と言いたがる人たち(精神科医・香山リカ著 SBクリエイティブ)』が発刊されています。次回は、発達障害の診断のための受診がなぜ3カ月、半年と待たされるのかを考えてみましょう。

(2020.1.20)

発達障害と言わないで その3

あきこまを支援する会 高橋 恒治

いよいよ、その3です。今回は、精神科医・香山リカ著“ 「発達障害」と言いたがる人たち ”から、その要点を拾い挙げてみます、独自の視点で組み立ててみましょう。

1 社会的な現象

“ 「発達障害」と言いたがる人たち ” の背景には「障害ではない」と言われて失望する人たちがいる。これは医療の問題というより社会的な現象である。その始まりは 2000 年、翻訳版が発刊された『片づけられない女たち』がきっかけで、診察室を訪れる人が目立ってきた。医者の中にも診断をすぐつける人と、「……、まあ個性でしょう」と診断を簡単につけない人とがいるくらい、診断があまりにも分かりにくい。

それに拍車をかけたのが NHK の取り組み。福祉系番組で 2013 年ころ早くも「待たされる時間」とのフレーズでその深刻さが取り上げられ、半年待ち、三カ月待ちの生の声が紹介された。2017 年には「発達障害プロジェクト」を立ちあげ、NHK スペシャルや人気番組「あさイチ」、そして ETV の福祉系番組で「発達障害」について取り上げたり、専用のウェブサイトで多くの情報を発信したりされることが多くなった。

2 発達障害の激増、その背景

文科省の調査では、2015 年 5 月 1 日の時点で発達障害により学校で通級指導を受けている子が前年比 6,520 人増で、調査を始めた 1993 年（平成 5 年、通級指導開始の年）との比較では 7.4 倍増となっている。その背景には、発達障害への社会的な注目の高まりによって、診断を求めて受診する親子が増えたことと、医者側の過剰診断の二つが考えられるとの指摘をしています。

具体的には、「言葉の発達がまわりより遅れている子ども」、「幼稚園や小学校で集団に入りにくいという特徴を持つ子ども」、そして「ちょっとしたこだわりがある子ども」がいると、親や教師が心配してすぐに小児科や精神科を受診させてしまう。発達障害外来に殺到する背景には一般の人たちがこの問題にやや敏感になりすぎて「私や私の子どももそうなのでは」と過剰に心配するようになった。

もうひとつ、行政側や一部の医師側も「発達障害を見逃すな」とどんどん診断をつけるようになっていく。「早期の正しい診断と適切な支援」に専門家の間からも疑問の声が上がっている。診断する必要がないケースにまで「過剰診断」をしている。あえて「発達障害」と名付ける必要もないものが含まれているのではないか。過剰診断は、DSM-IV の「特定不能の広汎性発達障害」といってもややこしいから『アスペルガー障害』と言ってしまふケースもしばしばある。便宜上、DSM-IV に入り込んだアスペルガー症候群という名称のために、過剰診断が生じることにもなってしまったのではないか。

もちろん、「おとなの発達障害」などの表現はない。

3 DSM-5 で消えた診断名

DSM-III (1987 年) で表記されていた「知的障害・自閉症・LD・ADHD」の総称としての「発達障害 (Developmental Disorder)」。7 年後の DSM-IV が発行された 1994 年には、「発達障害」という用語がアメリカの診断書からは消えた。

DSM-IV (1994 年) には、広汎性発達障害 (PDD) として、・自閉性障害 ・アスペルガー障害 ・小児期崩壊性障害 ・特定不能の広汎性発達障害、非定型自閉症 ・トゥレット障害 が挙げられていたが、DSM-5 ではこの概念が廃止され、自閉症スペクトラム症 (ASD) という診断名が採用された。日本の精神科医の集まりである日本精神神経学会は、2014 年に精神疾患の新しい診断名のガイドラインを発表し、「障害」を「症」に言い換えて表記することを推奨した。

一方、「ふつうの人とは区別のつかない軽度の発達障害」や「発達障害があるものの特殊な才能に恵まれている人」に注目が集まり過ぎるようになりました。こうした発達障害と特殊な才能を結びつけることも混乱の種となった。

著者香山リカから離れますが、用語「発達障害」をはっきり批判する人もいます。特異の才能の人を発達障害に括り込んでいることへの批判、そもそも発達障害という障害はないのだから不適切であるとの意見です。発達障害の言葉を使わずに、はっきり ASD、ADHD、LD の名称で正しく症状に触れていくことの重要性を説いています。

< 用語「発達障害」批判 玉水公子 論創社 2019.10 >

4 時代と ASD 型ライフスタイル

ASD の三つの特徴を持った人は、昔からいた。「対人関係の問題」「言葉やコミュニケーションの問題」「特異なこだわり」を持った人はいくらでもいる。採用した企業にとっては彼らが医学的に ASD であろうがそうでなかろうが、それは何ら影響がない。

一方、ASD 型人間に向けたようなサービスが誕生した。スマホゲーム業界だ。発達障害ビジネスになっていて大盛況である。ASD 型ライフスタイルは顔を合わせることなく、制限された中でコミュニケーションを行い、ゲームすることに徹底的にこだわることができ、多くの人にとっては非常に心地よいものになりつつある。

ASM 型ライフスタイルには“お金”が付きまとい、自己破産の心配もある。こうしたライフスタイルは結婚を遠ざけ、少子化につながっていく。発達障害ビジネスはまだある。製薬会社がいま“狙う”のが発達障害である。

5 「ADHD」や「アスペルガー症候群」はまたとない“個性”である。

「ADHD でもアスペルガーでもありません」と伝えると失望する人たちの中には、別の心理も隠されていて、「何らかの個性的な同一性がほしい」という欲求があるのではないか。現代社会では「平凡である」「どこにでもいる人間である」というのは、生きる価値がないに等しいほどつらいことである。たとえ「発達障害」と障害と名がつけられてもよいので、ほかの誰とも違う同一性がほしい人がいる。

発達障害の場合、いまだにその原因も障害のある部位も正確には特定されていない。いったん「片づけられない」という問題を「脳の発達のせい」と外在化して……「ただ、それはあなたの努力で乗り越えられます」と、その問題を引き受けなおすよう促す、というプロセスのほうがより治療的と言えるのではないか。「まずはできるところから」と目の前の家事や仕事に取り組む。その結果、若干でも整理整頓が進めば、求められている自己肯定感はさらに回復すると、方向性を示している。

< 2020.4.10 >